

前立腺生検を受けた患者との関わり ～インタビューを通して今後の看護に生かす～

Relationships with patients undergoing prostate biopsy
～We take advantage of the future nursing through the interview～

西6階病棟
島香奈恵 倉島久恵 白濱零
小池聖子 両角裕子

〈要旨〉本研究では前立腺生検を受ける患者が当検査において看護師にどのように関わってほしかったかを明らかにし、今後の看護に生かすためにインタビューを実施した。その結果、検査中に医師から次に何をやるのか説明があったことに安心感を得たという意見が聞かれた。検査中は必ずしも看護師の声かけを望んでいるわけではなかったが、検査前後での具体的な説明や、検査後の体調を気遣う声かけを望んでおり、安心感につながっていた。また高齢の患者も多く、行う処置などを全て一度に説明するのではなく、その都度の説明が役立っていたと考える。前立腺生検を受けた患者は羞恥心を感じながらも仕方がないと考えており、羞恥心への配慮に関して看護師に対する要望・意見は聞かれなかった。しかし、検査を受ける場所については抵抗がある患者もいることから、入院案内時に処置室を見てもらうことで、患者が具体的なイメージを持ち検査を受けることができるのではないかと考える。また貴重な患者の意見・思いをスタッフ間で共有し、看護に生かしていく。

キーワード：前立腺生検，羞恥心，看護師の関わり

I. はじめに

当院では1泊入院で前立腺生検を実施しており、検査は入院当日に行われる。検査はスタッフステーション内の処置台で行われるため、看護師の声が聞こえ、複数のスタッフが出入り可能な環境である。そのため、私たちは環境が患者の不安や羞恥心の増強につながっているのではないかと考えた。

そこで小井らや金本らの先行研究を調べた結果、前立腺生検を受ける患者の不安と不快な思いについてまとめられていた。小井らは、不安について検査結果に対する不安が最も大きい、対象者全員に不安があり、不安の内容は多岐にわたる¹⁾と述べている。また、金本らは不快な思いに関して「どうすることも出来ない恥ずかしさ」「看護師への申し訳なさ」「イメージできない体験への不安」「もうちょっとの気遣いがほしい」「行き過ぎと思える介入」等の7つのカテゴリーにまとめている²⁾。

しかし、先行研究では患者の不安や不快な思いについて述べられているが、その上で患者がどのようなケアを望んでいるかまでは明らかに

されていない。そこで私たちは、前立腺生検を受ける患者が当検査において看護師にどのように関わってほしかったかを明らかにすることで、今後の看護に生かしていけるのではないかと考えた。

II. 目的

前立腺生検を受ける患者が望む看護師の関わりを明らかにする。

III. 方法

1. 期間

2013年10月～12月。

2. 対象

当院で前立腺生検を受けた男性患者11名。

3. 調査方法

半構成的面接法。検査終了後2時間以上経過し状態が安定した頃、個室にて30分程度のインタビューを行った。インタビューは研究関係者が行い、入院受け入れや検査には関わらないこととした。

インタビューは患者の了承を得て録音し、

逐語録にした。

4. 分析方法

逐語録をもとにKJ法を用いて分析・まとめを行った。

IV. 倫理的配慮

①インタビューへの参加は任意であり、参加しない場合でも診療・治療・ケアに関して不利益を受けることはないこと ②一度同意されても、途中で撤回できること、体調が優れない場合はすぐにインタビューを中止すること ③インタビューの内容は録音するが、研究以外に用いることはないこと ④面接結果を分析する際、個人が特定される内容は削除すること ⑤録音されたものは、研究終了後に削除することを説明したうえで、同意が得られた患者にインタビューを行った。なお、この研究は信州大学医学部医倫理委員会の審査を経て、医学部長の承認を受けて行った。

V. 結果

インタビューに対する回答をまとめると【医療者の対応】、【検査の情報】、【環境】の3つに大きく分類できた。

1) 【医療者の対応】に関する患者の言動

『看護師さんがいつも廻ってきて、絶えず「どうですか？」と声をかけてくれて、診察・生検するときも「大丈夫ですか？」って声かけてくれて、患者の方に安心感というか不安を与えないような気持ちで、リラックスできて受けられたな。と』

『「大丈夫ですか？気持ち悪くはないですか？」って言ってもらえましたよ。そういうことは良いことじゃないですかね。』

『看護師さんは黙っててもちゃんと分かってくね。その行動をちゃんとやっていただいたので、ありがたかったと思っています。だからスムーズにいったと思います。』

『今これ何やります、とか、1発目、2発目、これで半分終わりましたとかね。非常に安心感がありますよね。それをやってくれたのは先生ですけど。次にやることを確認しながらやってくれるもんだから、こっちの覚悟ができていうか。これから何をやるか言ってくれるの

は、良いことですよ。』

『先生がすごく優しく、今度どうしますよ、あぁしますよってことを知らせてくれたので安心してやってました。誰かがね、どういうふうにしますけどね痛いですよとか、どこに注射しますよとか言ってくればありがたいですよ。』

『先生はあと何回この痛みが続くか言っておいて、それが励みになりましたね。看護師にとってほしかった対応としてはね、んん、僕らがこういう痛みを感じているのに対して、看護師さんや先生の声かけとかそういうのでなくなるとは到底思えないし、そこまで望んでないです。なにかあったときに呼ぼうと思うのは看護師さんだよ。』

『大丈夫？大丈夫？と看護師に言われたら、余計こっちが心配しちゃうし。何事が起きているかと思っちゃう。』

『誰だって不安はあるでしょ。不安を取り除くように、励ましてくれるようにこうだよ、こうだよって。そういうふうにしてもらったほうが安心感がある。』

2) 【検査の情報】に関する患者の言動

『入院の手続きの時に話を聞きました。よく分かってね。文章にあったからそれを今も持ってきてやりました。役に立ちました。』

『(注射の影響で) ふらつくから、お便所行くときは声をかけてくださいと言われてました。実際検査のあとはふらつきがありましたからね。ありがたかったです。』

『尿漏れパンツを用意してくれと言われて。どんなのを買おうかと思って売店に行った。初めてだからわかんないわけだ。パンツがいいのか簡単なやつがいいのか。そういうことも指示してもらったほうがいい。』

『ここに来て、説明を受けたら、やれ痛いだの、やれ血が出るだの言われたもんでね、やだなあと思いましたよ。』

『友達からも事前に聞いていましたので、抵抗なくずっと受けられました。そういうあれ(情報)がなくって、っていうと、場所が場所(陰部)だけに手こずるっていうか、抵抗がある気がします。』

『(一番気になったことは) そりゃ、検査の結果と痛みですよ。私痛みにも弱いもんでね、検

査当日は痛みのほうが気になって、検査の結果どころではなかったですよ。あとは、検査のときの体勢ですね。どんなふうにするんだろうって、すごく気になりましたよね。』

3) 【環境】に関する患者の言動

『声とかは聞こえてきたけど、気になりませんでした。場所がナースステーションの中だっことは知っていたから。陰部を露出することはもう仕方ないというか、検査なのでやらなくちゃいけないですよ。気にならないですよ。』

『人前でというか看護師さんの前だからね、ああいう格好をさせられるってことは抵抗なんかも、年寄りだから気にならなかったけど。やっぱりちょっと抵抗はありましたよ。』

『治療のために通らなきゃいけないことだから、恥ずかしいとかいってる場合じゃない。』

『検査さえ出来れば良いのであの場所でも全然かまいませんよ。声とか場所は全く気になりませんでした。』

『別に気にならない。(生検の様子を) 見ても良かったんだけど、(垂れ)幕があったもんで。あってもなくても良かった。』

『私は別にどうこう思わなかったね。本当に手術室に入るよりはね、ああいうところでみもらったほうが気持ち的にも楽ですよ。 (声が聞こえてきたけど) 気にならなかった。人がいてくれた方が安心感がありますよね。人前でさらしてやるわけではないからね。年とってるからかもしれないけど、なんか若い人が抵抗を感じるのかわからないけど。』

『抵抗あるのはね、こういう手術室とかそういうところじゃなくて、スタッフステーションでつながっているのは抵抗がある。誰でも出入りできるわけでしょ。こんなとこしかないのかという感じはした。個室とかそういうところでやるのかなと思っていた。』

『たまり場みたいなどころでやっている感じ。倉庫の隅でやっているかんじ。この病気で恥ずかしいと思つたらなにもできない。そういうことを考えても病気は解決しないし、いいほうに向かわないし。』

『あまりにも事務所の一角のような感じで、アレ?なんだこれはという気がしました。あまりにも患者を雑に扱っているんじゃないのかと』

4) その他の言動

『(一番不安なことは) 結果ですよ。そりゃ結果です。そのために来て生検したんですから。がんなのかどうか。この年になるとね、本当はね、こんな思いしてまで検査しないでそのまま死にたいと思っているわけですよ。でも、がんなのか、どうなのか気になってね。そこがね、自分の中での矛盾なんだよね。検査して安心感を得たいっていうのはあるかもね。』

VI. 考察

本研究を行うにあたって、私たちは検査を行う環境が患者に不安や羞恥心を与えているのではないかと考えていた。しかし、実際に患者にインタビューを行った結果、環境面から羞恥心や不安が強くなったという意見はほとんど聞かれなかった。それに対し、検査の説明や医療者の声かけが患者にとって安心感や不安を与える要因となっていた。

生検中、看護師の声かけにより安心感を受けた患者がいた一方で、医師が進行状況を伝えてくれたことが良かったという意見や医師の声かけの方が安心するという意見もあり、生検が始まってからは必ずしも患者が看護師の声かけを望んでいるわけではない。しかし、医師から患者への声かけが少ない場合は、看護師から患者へ声をかける配慮が必要である。その場合は「大丈夫?」とだけではなく「気持ち悪くはないですか?」「痛くないですか?」などの具体的な声かけを行うことが有効ではないかと考える。

患者の意見を読み解くと、看護師の介入で良かったという部分は検査前後の説明・対応であることが分かる。初めて生検を受ける患者には、検査前の点滴や注射を行う事、検査後の排尿の事など、これから何を行うか、検査後どのようになるのかの具体的な説明が役立っていた。また、2013年10月～12月に当院にて前立腺生検を行った患者の平均年齢は74.1歳と高齢であることから、全てを一度に説明するのではなく、その都度の直前の説明が役立ったのではないかと考える。

検査を受けた患者のほとんどは羞恥心を感じながらも仕方がないと考えていた。そのためか、看護師に対して羞恥心への配慮に関する意見や要望は聞かれなかった。

手術室や個室のような場所で検査を行うと考
えていた患者からは検査場所に対する不満が聞
かれた。しかし検査を受ける場所については、
個室を用意することは施設として困難である。
そのため、患者がもつ場所のイメージとの相違
を埋めるためにも、入院案内時に処置室を見
てもらうことで具体的なイメージを持って検査
を受けることができるのではないかと考える。

前立腺生検の結果により前立腺癌の確定診断
がされる。「もしかしたら、ガンかもしれない」
でも「検査を受けなければ判断できない」とい
う不安や葛藤を抱いている可能性が高く、これ
らを踏まえて関わる必要がある。

VII. 結論

- ・ 患者は生検中に、医師からの声かけに安
心し、声かけを望んでいる。
- ・ 看護師の介入で良かったという意見が多
かったのは、検査前後での説明・対応で

あった。

- ・ 患者に声をかける時は、「大丈夫ですか」
と尋ねるだけでなく、具体的な内容で
の声かけが有効である。
- ・ 前立腺生検を受けた患者は羞恥心を感じ
ながらも検査だから仕方ないと割り切っ
て考えていた。
- ・ 具体的なイメージを持ち検査を受けられ
るように、入院案内時に処置室を見ても
らうことが必要である。

VIII. 引用・参考文献

- 1) 小井夕紀子, 荒川麻由美, 他: 1泊2日入
院により前立腺生検を受ける患者の不安特
性, 第34回成人看護I, 196-197, 2003.
- 2) 金本香織, 小西由紀恵, 生間悦世: 前立
腺生検を受ける患者の不快感, 松江市立病
院医学雑誌, 15 (1), 49-54, 2011.